

浪江の

こころ通信

・第66号・



平成23年3月11日に発生した東日本大震災、そして福島第一原子力発電所の事故により、福島県内外に分散避難した浪江町民。長期化する避難生活、先の見えない不安の中で、町民の皆さんがどのような思いで生活し、ふるさとへの思いを抱いているのか。

こうした町民の思いをつなげるために、“浪江のこころプロジェクト”が立ち上げられました。一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアム(※)が中心となり、全国各地のNPO、大学等の皆さんが取材を進め、浪江町との連携のもと「浪江のこころ通信」が編集・発行されます。

浪江のこころプロジェクトは、分散避難している町民の皆さんの声を「浪江のこころ通信」を通してお届けし、ふるさと浪江町がかつての暮らしを取り戻すことへの願いとこだわりを発信・共有しようとするものです。

※一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアムは、東北圏(7県)の地域コミュニティ再生や協働のまちづくりの推進を目的として、大学、NPO、企業、経済団体、行政等が連携したコミュニティ支援ネットワーク。仙台が本拠地。

再取材シリーズ

再会・浪江のこころ

これまで取材を受けていただいた皆さんに、再度の取材を行うコーナーです。

3・11から5年以上が経過した今、感じていること、伝えたいこと、そして最初の取材以降の気持ちの変化やふるさとへの思いなど皆さんの声をお届けします。

「浪江のこころ通信／第66号」への感想をお寄せください。

【連絡先】〒964-0984 福島県二本松市北トロミ573番地
「浪江のこころ通信」宛
FAX.0243(22)4218





浪江中学校3年 松本穂乃香さん(田尻)

中・高・大学生に「浪江のころ通信」の原稿を募集したところ、浪江中3年 松本さんから応募がありました。浪江中の魅力と今の気持ちを伝える原稿をご紹介します。



ふるさとを離れている私たちだからこそ
わかりあえることがある。
浪江中学校に通えてよかった。



▲浪江中の生徒の皆さんが、ストーリーから全て作成した紙芝居「浪江中学校成長物語」と一緒に。

東日本大震災そして原発事故に伴う避難。あの日から一度も浪江町には帰っていない。あの日から私は、津島、川俣と避難所を転々とし、しばらくして神奈川の親戚の家に落ち着いた。私が学校へ通う時期となったとき、「神奈川の学校に通うか。」と父に聞かれた。私はとっさに返した。「行くなら、浪江の……せめて福島の学校がいい!」

はつきりと言いつつ自分には驚いた。両親は私の意見を尊重してくれ、神奈川から福島へ戻ることになった。そこから、また体育館、旅館を経て、今は仮設住宅で生活している。なんと学校は念願の浪江中に通うことができている。避難している学校より普通の学校に通った方がいいんじゃない?と言う人もいた。だけど私は、浪江中に通ってとても良かったと思っている。なぜだろう?そう考えてみると、浪江中に何らかの魅力があるからかなと思う。

私は浪江中が大好きだ。毎日が楽しく過ごせて、今がとても幸せだ。こんな幸せな日々が続いているのは、震災のあの日から継続していただいている皆さんの支援、元気づけてくれた人々、避難所として受け入れてくれた自治体、あのとき福島に帰ることを決断してくれた家族、浪江中の先生や仲間たち、本当にたくさんの方々のおかげだと思っている。私はたくさんの「ありがとう」を送りたい。これからもたくさんの困難があると。でも、私には支えてくれている人がいる、浪江の仲間がいると思うと、どんな困難も負けず乗り越えていけると私は思う。いつまでも「ありがとう」の気持ちを忘れずに一生懸命生きていきたい。



常盤 梨花さん(川添)

取材者：一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアム 大泉
取材日：9月20日

やりたいことで前向きに生きていきたい



▲浪江焼麺太国のパンフレットを手に。司会業では、女性司会者3人によるユニット「DREAM COLORS」を組んで活動中。

震災時は高校2年だった常盤さん。現在は、司会業とともに浪江焼麺太国の事務局スタッフとして地域おこしに携わっています。震災にとらわれずに自分の道を生きていきたいと明るく語ってくれました。

◆進学・進路に悩んだ頃
震災後、母親の実家があった南相馬に避難し、その後会津、郡山を経て、今の本宮の家に転居しました。親は苦労したと思いますが、私は高校2年生だったので、受験勉強をしたり、進路に悩んだり、その時期に経験することを普通にやって過ごしていました。当時は声優に憧れていて、その道の専門学校に進むかどうか悩んでいましたが、結局会津の短大を選びました。在学中から、声優と同じように声を生かせる司会業の勉強を続け、今は司会者として活動しています。友達同士でも、震災の話はあまりしません。友達とはバラバラになりましたが、それは震災が無くて、

進学、就職でそれぞれの道を行く時期だったからと思っていま。それに私たちは、中学校から携帯で連絡をとりあっていた世代なので、会わなくても寂しさを感じないのかもしれない。(笑)
◆若い人たちの活動を支えたい
浪江に愛着を感じていますが、単に生まれ育ったからではありません。震災前に、浪江町をPRするためご当地アイドルを立ち上げようという浪江焼麺太国の企画がありました。私も声をかけられ女子高生プロデューサーとして、振り付けや作詞、イベントの手伝いをしました。そういう経験もあって、町が元気になるように何かしたいという気持ちが芽生えたのだと思います。現在も浪江焼麺太国の事務局スタッフとして、イベントの司会や事務サポートをしています。同じ世代の人たちが響きあって何かができればうれしいですね。若い人たちの活動を支える存在でいたいなと思っています。

◆辛くなるほど頑張らない
私自身は、震災で自分の人生が変わったとは思っていません。震災がなくとも、きっと同じ道を選んでいたいと思います。だから、「震災さえなければ」と思ったり、逆に「震災を乗り越えて頑張りたい」というのも、何か違うような気がしています。あくまでも自分のために、自分の生きやすいようにした方がいい。辛くなるほど頑張る必要はないんじゃないかと。昔、不登校だった時代もあったので、余計にそう思うのかもしれない。とにかく、震災にとらわれることなく、前向きに生きていきたいですね。自分のやりたいことと生活できたら素晴らしいと思います。それは、私にとっては司会の仕事です。いろいろな経験を重ねて、司会の価値を高めていきたいですね。



「那須避難者の会」 (愛称：那須やまなみの会)

会長 江川 等さん(樋渡)・江川 アイさん(樋渡)
山本 芳子さん(北幾世橋)・菅野 幸夫さん(両竹)

取材者：一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアム 大泉
取材日：10月5日



小さなお節介が人をつなぐ



▲那須避難者の会による「お茶会」の集合写真。

◆那須での暮らし
山本さん 私は、流山市でも那須町でも、すぐに仕事を見つけね。
船橋市へ行きました。その後、川崎市、品川区にある娘や姉の家滞り、4月になってやっと役場と連絡がつき、役場のあった二本松市東和文化センターに行きました。役場から草木染ができる裏磐梯のペンションを紹介してもらい、そこに4か月滞在した後、川崎市の国家公務員住宅に移りました。那須塩原市には25年の7月に来ましたね。

江川アイさん 私は、草木染で被災者交流の場をつくったり、体験教室を開いてきました。他県の染仲間の支援で裏磐梯、川崎市、白河市で展示会を行ったほか、28年5月には「3・11フクシマを忘れないで！」の思いを込めた草木染作品展を那須塩原市で開催しました。福島県、神奈川県、千葉県、栃木県内等から多くの方々に来ていただき、交流を深めました。「海よ」「分断の線」「無念と怒り」「生きる」「非情のフエンス」等と

て働くようにしました。じつこもっているのがイヤなんです。地域の人も話をしたいので、ご近所付き合いのほか、旅行やイベントにも積極的に参加しています。夫は、福島に帰りたいのですが、私はここでも暮らしていけるなと思っていきます(笑)。
菅野さん 私が苦労したのは仕事ですね。ずっと自営業だったため、職場になじめませんでした。それで、調理師の免許と経験を生かして、自分で店を持つことにしました。27年には、「Papasoon888」というレストランをオープンしています。



▲左から 菅野幸夫さん、山本芳子さん、江川アイさん、江川等さん。後ろの暖簾は、アイさんによる染の作品。

那須地域に住む福島県からの避難者の交流を企画・運営する組織「那須避難者の会」は、昨年9月に発足しました。
会長の江川等さんと草木染作家のアイさんご夫妻、那須塩原市内にレストランを構えた菅野幸夫さん、那須町に住む山本芳子さんが集まり、浪江からの避難の経緯、今の暮らしと、会の活動について語り合いました。

◆那須避難者の会の活動
江川等さん いつしか那須に住む避難者同士の仲間もできました。そのつながりを生かして交流組織「那須避難者の会」を立ち上げました。那須塩原市周辺に、福島県からの避難者約100世帯が住んでいますので、互いに支え合えるつながりができると思っています。8人の役員で話し合っています。28年の春にはマイクロボスで下野市に行き、県内の避難者と交流しました。4月には「花見会」を開催し、11月にはいわきへのバスツアーや、年明けには新年会も予定しています。イベントの情報には「おたより」というチラシにして、市の協力を得て避難者宅に配布しています。

◆浪江から那須までの日々
山本さん 住まいは北幾世橋で、海や山、川も近くにあり、とても良い所でした。畑仕事が好きで、野菜を作っていましたね。震災の日は、私と夫、母の3人で着の身着のまま津島へ逃れ、そこから東和町の体育館に避難しました。そして姉の住む千葉県流山市に移り、借上住宅に住みました。3年間で4か所転居しましたね。
流山市でも畑を借りて野菜を育て、知り合いやご近所に配っていました。そこから交流が生まれ、こちらに移住しました。
菅野さん 短時間では語りつくせないほどの経験をしました。うちは、海に近い両竹地区で食品・雑貨を商っていた「菅野商店」です。私は消防団部長だったので、地震後すぐに出勤しました。請戸小学校の様子を見に行き、児童が避難したことを確認して、校舎の外に出ました。するとゴォーという音がして、白波が立った黒い壁のような津波が押し寄せてきました。消防車を猛スピードで走らせ、田んぼのあぜ道を突っ切り、大平山まで逃げました。山裾では、流されてきた人を引き上げて救出

◆江川アイさん
江川アイさん 会として大きな方針があるわけではなく、少しずつ自分たちができることでやっていければ良いと思います。皆で呼びかけて独りぼっちの人を無くしていきたいですね。

◆江川アイさん
江川アイさん そうですね。それと、どこに暮らすにしても、人同士の小さなお節介が大切だと思えます。私も、皆さんのお節介のおかげで、ここまでこれました。
菅野さん お節介が人のつながりをつくるんですね。
江川等さん 会として大きな方針があるわけではなく、少しずつ自分たちができることでやっていければ良いと思います。皆で呼びかけて独りぼっちの人を無くしていきたいですね。

しました。夜を徹して消防団活動を行い、翌朝8時には残された人の救出作業を予定していましたが、原発事故で果たすことはできませんでした。
家族と荻野小学校や川俣町の福田小学校に避難し、そこから双葉町の人たちと一緒に、バスでさいたまスーパーアリーナに行きました。その後、さいたま市大宮区の借上アパートに移り、姉夫婦の紹介で那須塩原に転居しました。
江川等さん サイクリングが趣味で、震災の日も請戸の海へ行く予定でした。でも、虫の知らせか、行きたくないなあと思っただけです。もし行っていたら、命がなかったかもしれません。
江川アイさん 「津波、逃げよ」の町防災放送を聞いて、夫と二人で中央公民館に避難しました。それが10箇所に及ぶ避難生活の始まりでした。公民館では水・食料の確保や、ラジオ情報を職員に伝える等のお手伝いをしました。翌朝、原発事故の情報を聞き、津島活性化センターに行きました。7時間余りで「福島方面に逃げる」ということになり、川俣南小学校体育館に移動しました。3月15日早朝には、渋滞の中15時間かけて、千葉県

◆江川アイさん
江川アイさん 会の愛称を、「那須やまなみの会」としました。那須連山と阿武隈の山並み、そして請戸の波を重ね合わせて命名しました。
山本さん 日にちが経つにつれ、それぞれの事情が違ってきて、避難者同士でも話がしにくくなっているかもしれません。5年前の話はできるのに、共通の話題がないと今の生活の話ができない。同じ価値観の人でない、関係が深まらないということもありますね。
菅野さん 失ったものを思い出してもしょうがない。新しいものをつくるしかないです。前向きに、胸張って生きていきたいです。
江川アイさん そうですね。それと、どこに暮らすにしても、人同士の小さなお節介が大切だと思えます。私も、皆さんのお節介のおかげで、ここまでこれました。
菅野さん お節介が人のつながりをつくるんですね。
江川等さん 会として大きな方針があるわけではなく、少しずつ自分たちができることでやっていければ良いと思います。皆で呼びかけて独りぼっちの人を無くしていきたいですね。



浪江大吉SSB 松崎 智恵さん(権現堂)・平田 春美さん(権現堂)

取材者：NPO法人山形の公益活動を応援する会・アミル 柴田
取材日：10月2日

チームのメンバーが楽しんでプレーできるようサポートしています！ メンバーは家族のような大切な存在です



▲「浪江大吉SSB」のヘルメット



▲試合中スコアをつける平田さんと松崎さん

激を受けて私たちも楽しいです。今日のメンバーは一番若い子で25歳。今日も朝一で茨城から駆けつけてくれたメンバーもいます。平田さん もう皆家族みたいな感じでですね。年代がばらばらです。

◆高畠町への感謝
松崎さん 大会終了後、高畠町の皆さんと一緒に芋煮も食べさせていたでいて感謝しています。福島は味噌で豚ですが、山形の醤油の甘い味も大好きになりました。また来年も楽しみにしています。実は今回、高畠町長さんが経営している旅館にまたま宿泊させていただきました。旅館の方を通してこれま

松崎さん そうなんです。私も最初は応援だけでした。自分でも勉強してスコアをつけられるようになりました。今は平田さんに引き継いでもらっています。

松崎さん そうですね。楽しい。年代が違うからこそ相談し合えたり、年が離れてるからこそ言いやさかったり。
平田さん メンバーの奥さんや彼女さんが集まる「SSBガールズ」があり、去年は休みがたまたま合ったので、高畠町に集まり、皆で応援やサポートしました。



▲メンバーの集合写真 2列目右から2人目が平田春美さん
2列目右から3人目が松崎智恵さん

ソフトボールチーム「浪江大吉SSB」の皆さんが、今年も高畠町総合体育大会ソフトボール種目に参加しました。今年で6回目の参加です。試合後に行われる芋煮会にも参加し、高畠町の皆さんとの交流も楽しめました。今年は参加9名と試合できるぎりぎりの人数での参戦でしたが、例年と変わらない元気なプレーを見せてくれました！

今回は、松崎智恵さんと平田春美さんにお話をお聞きしました。お二人はチームのマネージャーとしてメンバーの皆さんを見守り、サポートや応援をしています。

◆今の暮らし
松崎さん 今仙台に暮らしています。私も夫も学生の時仙台にいて知っていたる所でしたし、震災当時、私の両親が山形県高畠町、夫の両親が二本松市にいてそこから高速で行きやすいので、仙台に移ったという感じです。
平田さん 震災当時は会津坂下町に一時避難し、そこから群馬県に移動しました。夫は福島県に帰郷したい思いがあり、相馬市に移り住みました。現在は館林市と相馬市を行き来しています。震災前は夫と私の両親ともども浪江町に暮らしていたので、家族が離れていると寂しくつらいことがあります。
松崎さん 友達や両親が今までとても近場だったので、なかなか会えないというのがつらいです。でも徐々に仙台でも新しい友人もできてきて、だいぶ慣れてきました。
平田さん 震災後、お墓参りの時期は、夫の両親と家族揃って浪江に行っています。夫の両親は仙台に避難しているの、合流して一緒にお墓参りをするようになってきました。
松崎さん うちも震災を機に家族皆で出掛ける機会が多くなりました。

◆チームのこと
松崎さん 今年の高畠町大会は参加人数が少ないですが、それもチームの皆が現実だんだん戻ってきており、仕事も普通になってきているからだと思いません。昨年までは仕事が本格的に始動していないこともあり集まりやすかったですが、今はメンバーも年齢的に責任ある立場になり休みを取りづらかったり、仕事も忙しくなったり徐々になりに戻ってきているのかなと感じています。
平田さん 浪江に暮らしていた頃は、ナイターで練習試合をし、その後飲みに行っていました。震災直後からメンバーとは頻りに連絡を取り合い飲みにいき、近況などを話しています。
◆チームへの想い
松崎さん 結果よりも個々それぞれが楽しんでもらえれば良いかなと思っています。年齢もばらばらなので、色々な年代から刺

高畠町の皆さんから メッセージをいただきました

●高畠町ソフトボール協会 会長 菅野康雄さん
毎年1年に1回来てもらおうこと、楽しみにしています。浪江の方たちも楽しみにしてくれているようですが、こちら浪江の皆さんが来るととても明るくなります。浪江の皆さんはとにかく元気がありますね！
大会終了後の芋煮会にも去年一昨年と参加してもらい、今年で3回目です。去年から浪江町のソフトボール協会からも大会の招待を受けていますが、今年は日程が合わず残念ながら参加できなかったのが、計画を立ててぜひ参加したいと思っています。

●やきとり大吉高畠店 店長 伊藤健彦さん
今回は参加人数が少し少ないですが、皆さん生活も落ち着いてきたのかなと感じ、良い事だと思っています。毎年いらしてくださる方や5年連続でいらしてくれている方など、皆さんと集まれる場所なので、年に1回お会いできることを楽しみにしています。休みを取れなくなったというのはないでしょうか。今回見えない顔もあったので、来年はぜひいらしてくださることを楽しみにしています！

◆これからのこと
松崎さん 最近はずっとではあるんですが、私の友人など今後の生活に向けて動いていますが、距離は離れているんですが、時間を作って会ったり話したりしています。今は震災の時の話より、今後こういふふうにしていこうと思うなどの先の話、明